

状態像に応じた
福祉用具の交換利用効果
事例集



平成22年3月
社団法人日本福祉用具供給協会

目次

はじめに	2
1. この事例集のねらい	3
2. 交換利用事例の分析結果	4
3. 効果的な交換利用のための取り組み	11
4. 事例の紹介	12
おわりに	21

はじめに

福祉用具貸与サービスのメリットの1つとして、利用者の状態像の変化に応じて適切な用具を提供し続けられることがあげられます。また、福祉用具の利用効果は様々な観点から評価することができますが、そのうち、適切な用具を使用することにより「長期間ADL状態を維持できること」は重要な点であると考えられます。

そこで、平成21年度に実施された「状態像に応じた福祉用具の交換利用効果に関する調査」では、福祉用具貸与サービスの意義を確認し、利用の促進をはかることを目的として、状態像の変化に応じた福祉用具の交換利用の実態や長期利用の効果について分析してとりまとめました。

この事例集では、調査結果の概要や、効果的な交換利用を促進するための取り組みのヒント、収集した事例の分析結果や特徴的な事例などをご紹介します。介護支援専門員、福祉用具専門相談員等の皆様が、現場での業務において活用していただき、利用者の状態像等の変化に応じた効果的な福祉用具の利用促進に役立てていただければ幸いです。

1. この事例集のねらい

この事例集は、福祉用具の交換利用の効果をご紹介し、利用者の生活ニーズの維持・拡大につながる適切な福祉用具の交換利用を促進することを目的としたものです。

平成21年度に行われたアンケート調査の結果や収集された交換利用の事例をもとに、効果的な交換利用のための取り組みのポイントや、具体的な事例をご紹介しています。

この事例集の構成は、次のとおりです。

交換利用事例の分析結果

はじめに、アンケート調査の集計結果の中から、主なデータを示しています。事業所が考えている交換利用の利点、1か月間の用具の貸し出し、返却の発生状況、交換利用の効果などについてご紹介しています。

効果的な交換利用のための取り組み

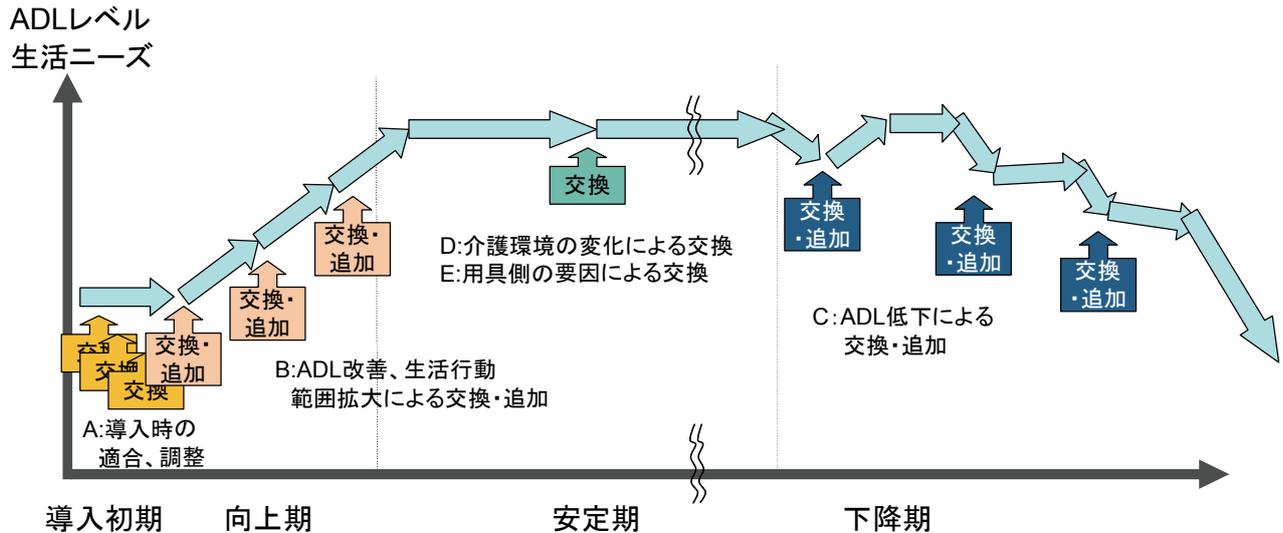
アンケート調査により寄せられた、各事業所で取り組まれている効果的な交換利用のための工夫についてまとめました。

効果的な交換利用の事例

調査において収集した事例の中から、8つの事例を取り上げて、交換利用の状況を具体的に示し、利用者の状態に応じた効果的な用具選定のヒントなど、効果的な交換利用のポイントを整理しています。

2. 交換利用事例の分析結果

この調査では、次のような交換・追加利用パターンを設定し、このパターンに沿って、交換利用の実態および効果を整理しています。



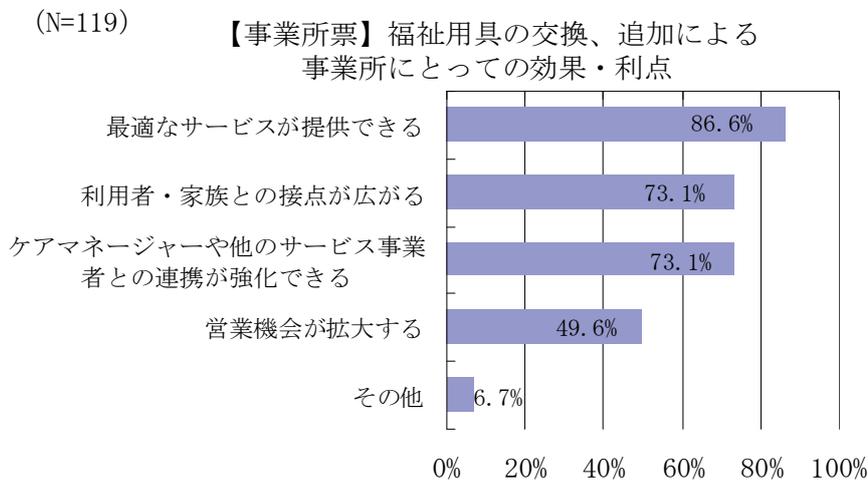
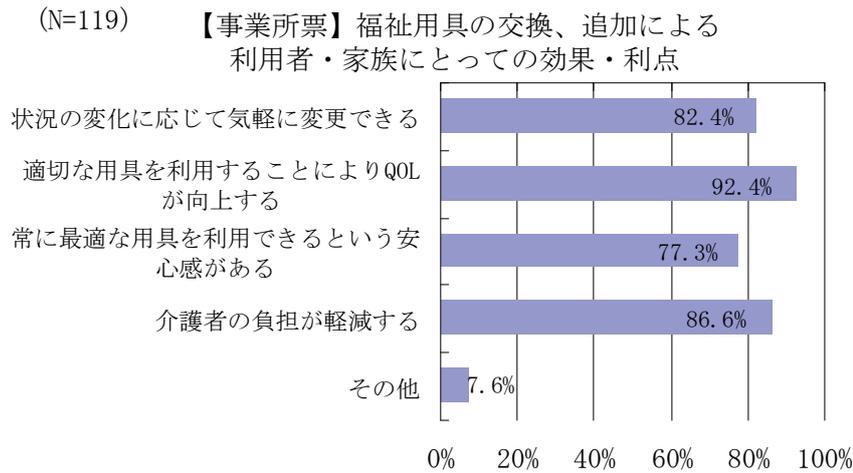
- A: 導入時の調整：導入初期に、利用者の身体状況や生活環境に適合させるための調整を目的とした交換
- B: ADL改善・生活ニーズ拡大：用具を利用することにより、ADLの改善や生活ニーズ、行動範囲が拡大したことによる用具の交換や追加
- C: ADL悪化：ADLが悪化したり、身体機能が低下に伴う、生活の維持や安楽のための用具の追加や交換
- D: 介護環境の変化：引越しや住宅改修など生活環境の変化や、介護者の変化に伴う用具の追加や交換
- E: 用具の要因（故障・摩耗等）：部品の故障や摩耗・劣化などに伴う用具の交換
- F: その他

このような利用者の状態像の変化や、介護環境の変化、その他用具の要因等によって、柔軟に交換、追加を行い、常に利用者の状態像や利用状況に応じて、最適な用具を利用し続けることができるのが、福祉用具貸与のメリットであると考えられます。

2. 交換利用事例の分析結果

ここでは、平成21年度調査において収集した119事業所からの回答について、集計、分析した結果の中から、主なものをご紹介します。

【福祉用具の交換、追加による効果・利点】



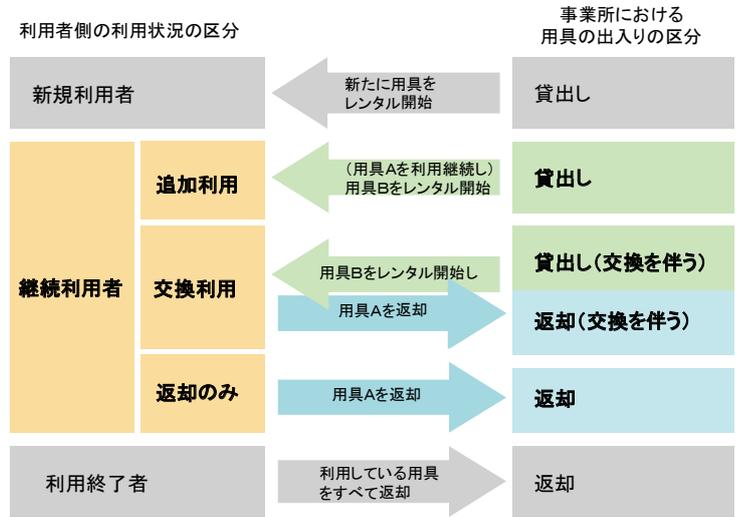
- 9割以上の事業所で、「利用者・家族にとっての福祉用具交換、追加利用の効果・利点」として、適切な用具を利用することによるQOLの向上をあげています。また、約8割の事業所は、介護者の負担軽減、気軽な変更により適切な用具の選定ができると回答しています。
- 事業所にとっての効果・利点としては、最適なサービスが提供できるという回答が最も多くなっています。

2. 交換利用事例の分析結果

【1か月間の貸出し、返却の状況】

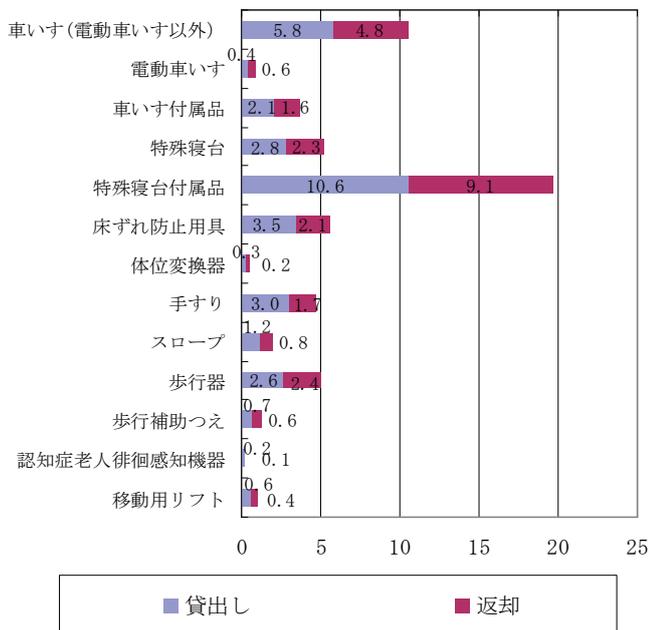
平成21年11月中旬～12月中旬に、事業所で行った貸出、返却の記録を集計したものです。

※新規利用者、利用終了者に関する貸出・返却の件数は集計に含まれません。

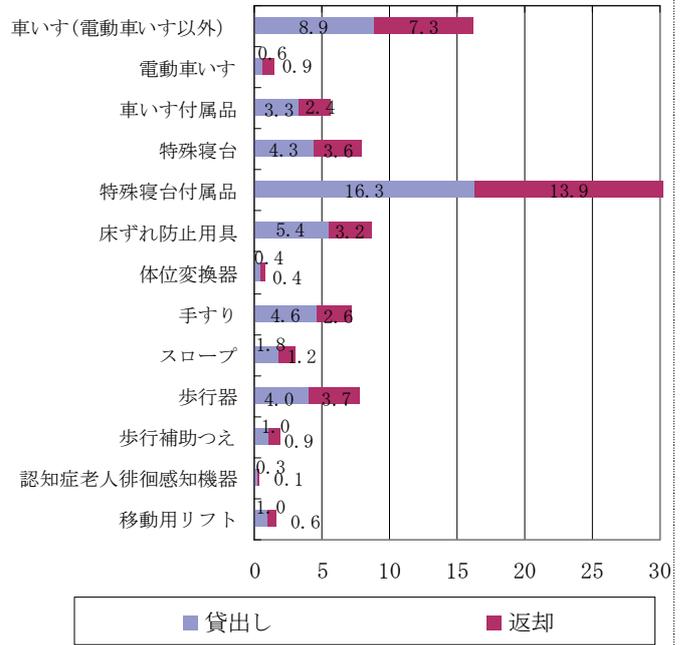


■ 1事業所あたり、および、利用者1,000人あたり貸出し、返却件数

【記録シート】1ヶ月間の福祉用具種類別の貸出し・返却件数（1事業所あたり）



【記録シート】1ヶ月間の福祉用具種類別の貸出し・返却件数（利用者1,000人あたり）



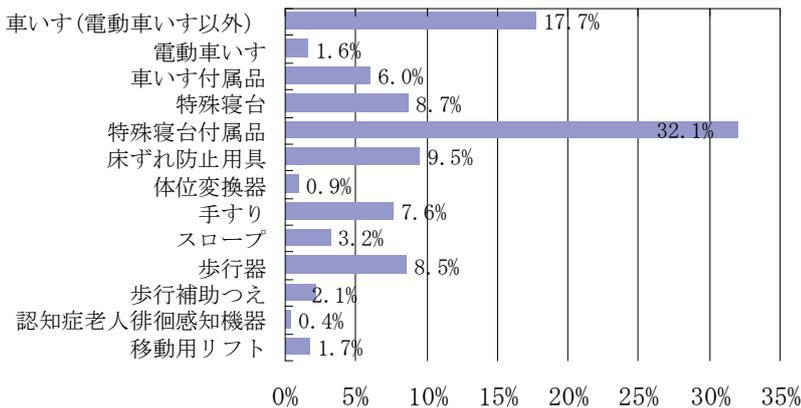
- 貸出し、返却の件数は、用具の種類によって差があります。1か月間に記録された1事業所あたりの貸出し・返却の合計件数は、特殊寝台付属品が19.7件、車いすが10.5件でした。
- 利用者1000人あたりに直すと、もっとも多い特殊寝台付属品で30.2件です。すべての用具の合計では92.8件であり、1か月間に利用者およそ100人に対して1件の返却や貸し出しが発生していることとなります（新規利用の件数、利用終了の件数を除く）。

2. 交換利用事例の分析結果

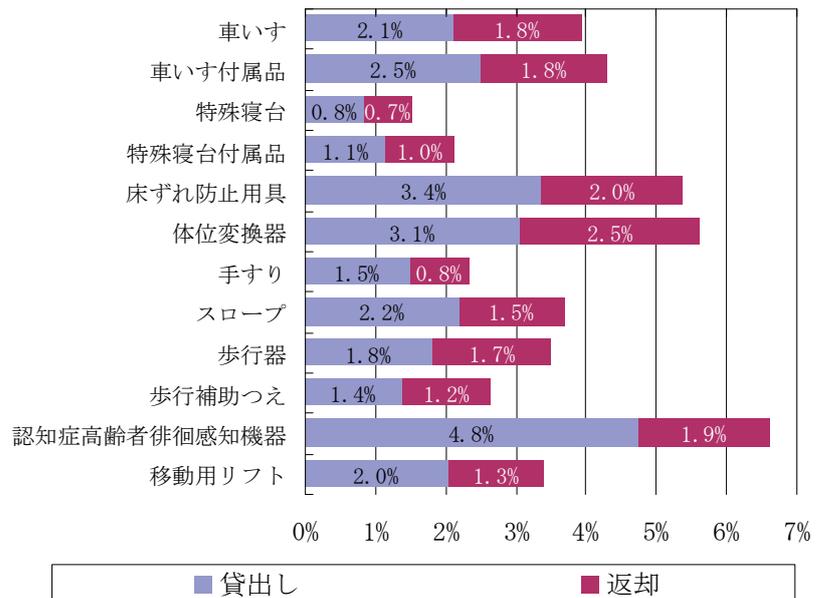
■ 貸出し、返却の件数と発生頻度（推計値）

(N=6,493)

【記録シート】1ヶ月の福祉用具種類別件数



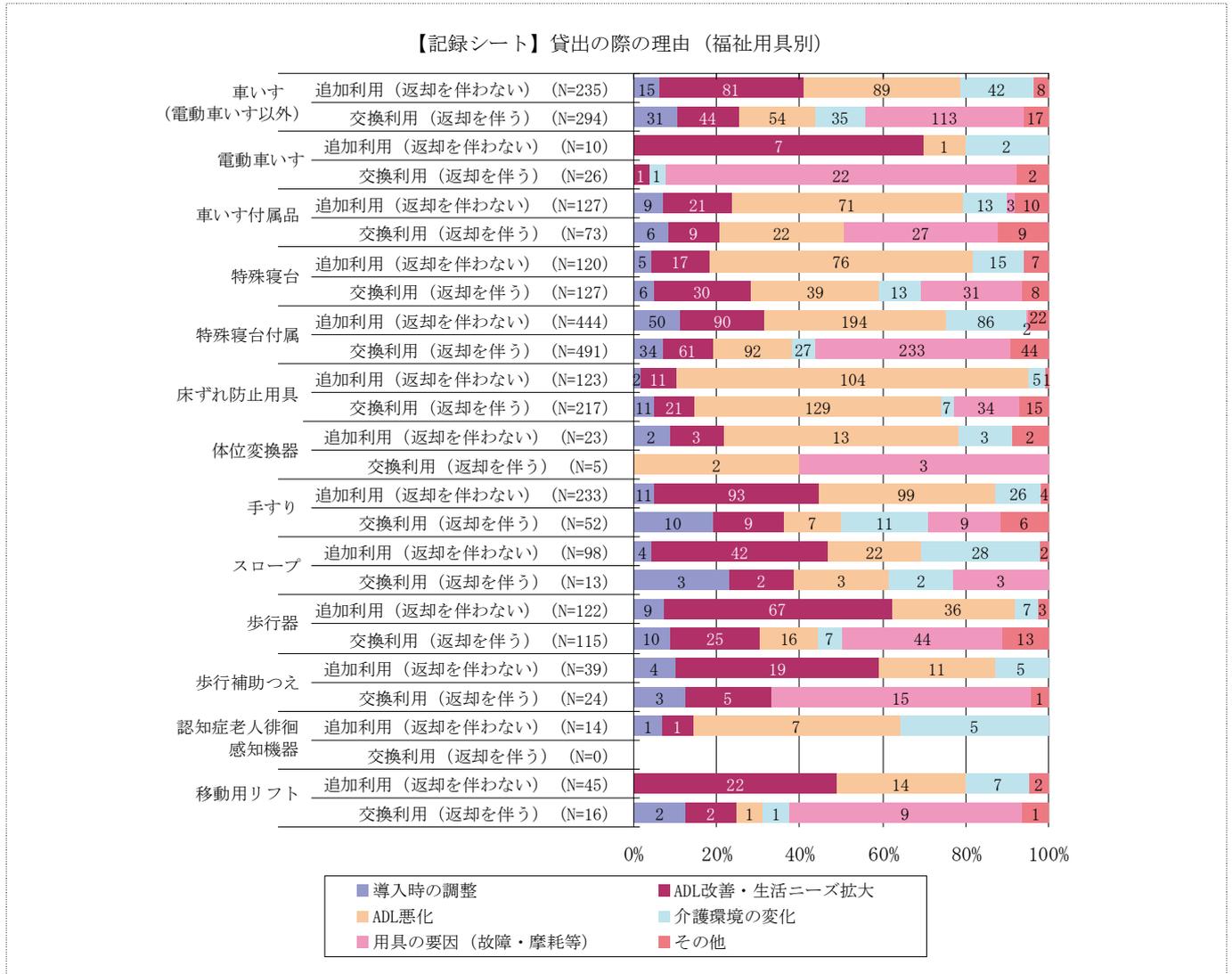
貸出し、返却の発生頻度（推計値）



- 1か月間に記録された貸出し・返却の件数6493件のうち、「特殊寝台付属品」の比率が32.1%と最も高く、次に高いのは「車いす」の比率が17.7%でした。
- 各事業所の利用者数をもとに、介護給付費実態調査のデータにより利用者に貸し出されている用具別の件数を推計し、「(貸し出されている件数に占める)貸出し・返却の発生頻度」を算出したところ、床ずれ防止用具、体位変換器、認知症高齢者徘徊感知機器が高いという結果になりました。特殊寝台は、貸出、返却の件数は多いのですが、他の用具に比べて貸出されている件数も多いため、「貸出し・返却の発生頻度」としては、比較的低いと考えられます。

2. 交換利用事例の分析結果

■ 貸出しの際の理由



■ 追加利用の場合の貸出の際の理由は、車いす、車いす付属品、特殊寝台、特殊寝台付属品、床ずれ防止用具、体位変換器においては「ADL悪化」が最も多いという結果です。

■ 一方、電動車いす、スロープ、歩行器、歩行補助つえ、移動用リフト等、移動（外出）に用いられる用具については、「ADL改善、生活ニーズ拡大」を理由として、追加利用されているケースが多いことがわかりました。

■ 交換利用の場合は、車いす、電動車いす、特殊寝台付属品、歩行器、歩行補助つえ、移動用リフトにおいては、「用具の要因（故障・磨耗等）」の比率が最も高くなりました。

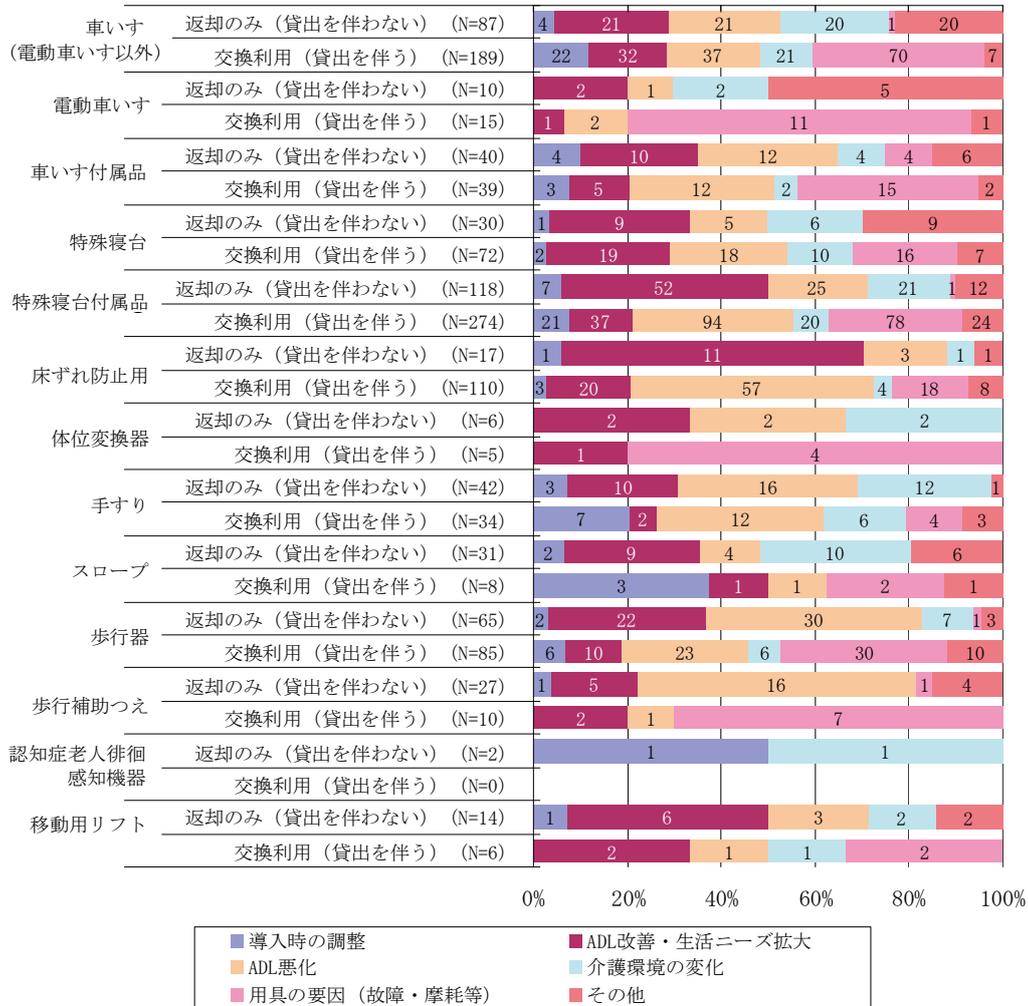
※ 「導入時の調整」は「調整不足」を意味するものではありません。

※ 「用具の要因（故障・磨耗等）」には利用者の体形の変化等の利用者側の要因によるものや新製品への変更等も含まれている可能性があります。

2. 交換利用事例の分析結果

■ 返却の際の理由

【記録シート】返却の際の理由（福祉用具別）



- 返却のみの場合、特殊寝台付属品、床ずれ防止用具においては「ADL改善・生活ニーズ拡大」の比率が最も高く、ADL向上により用具を使わなくても起居が可能となり返却しているケースが多いことがわかります。
- これに対して、手すり、歩行器、歩行補助つえは、「ADL悪化」の比率が高く、歩行ができなくなったために用具が不要となっているケースが多いことがわかります。
- 交換利用の場合は、車いす（電動車いす以外）、電動車いすについては「用具の要因（故障・摩耗等）」の比率が最も高いことがわかりました。

※ 「導入時の調整」は「調整不足」を意味するものではありません。

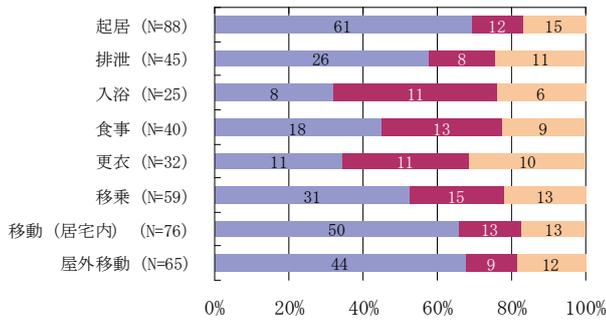
※ 「用具の要因（故障・摩耗等）」は利用者の体形の変化等の利用者側の要因によるものや新製品への変更等も含まれている可能性があります。

2. 交換利用事例の分析結果

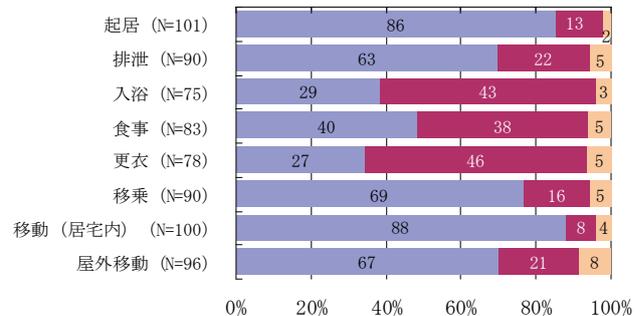
【事例に基づく利用効果】

提供された136事例において、福祉用具を利用する前と調査時点での変化を比較した結果です。

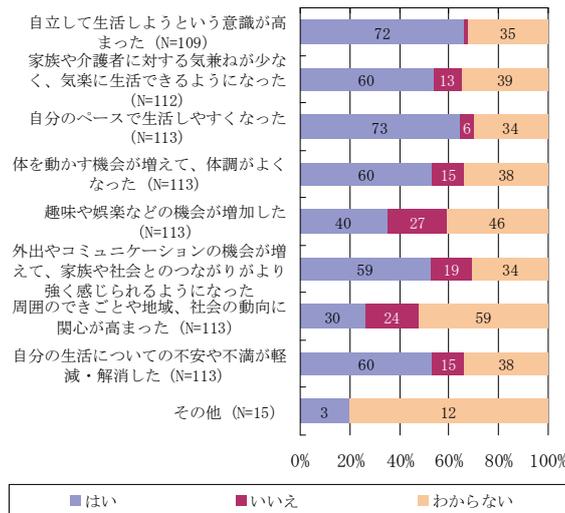
【事例票】ADLの変化（福祉用具を全く利用していなかったときと調査時点の比較）



【事例票】介護負担の変化（福祉用具を全く利用していなかったときと調査時点の比較）



【事例票】利用者の意識の変化（福祉用具を全く利用していなかったときと調査時点の比較）



- ADLの変化は、起居、排泄、移乗、移動（居宅内）、屋外移動等、ほぼすべての動作において、「改善」の比率がもっとも高いことがわかりました。
- 利用者の意識の変化については、「自立して生活しようという意識が高まった」、「家族や介護者に対する気兼ねが少なく、気楽に生活できるようになった」「自分のペースで生活しやすくなった」「体を動かす機会が増えて、体調がよくなった」、「外出やコミュニケーションの機会が増えて、家族や社会とのつながりがより強く感じられるようになった」「自分の生活についての不安や不満が軽減・解消した」の割合が5割を超えています。
- 介護負担の変化では、起居、排泄、移動（居宅内）、屋外移動については、楽になったと答えた人の割合が5割を超えています。

3. 効果的な交換利用のための取り組み

「レンタル」という提供形態のメリットは、利用者の状態像や介護環境等の変化に応じて柔軟に用具を交換、追加し、常に利用者の状況に最適な用具を最適な状態で提供できることです。また、そのことにより、利用者の生活を支え、生活における満足を高めることができます。

この機能を十分に果たすためには、「**利用者の状況をいかに適時に、精度よく把握するか**」が重要です。つまり、確実にモニタリングを行い利用者の状態像や利用状況について常に正しく把握するとともに、状況の変化を予測して現状のみならず予後を視野にいたしたアセスメント能力を高めることが必要なのです。

そのために各事業所において取り組まれている様々な工夫を以下にご紹介します。

モニタリング・アセスメントに関する取組

- 納品後1週間後、その後は3ヶ月毎に訪問して、利用者の状態と利用している福祉用具が適合しているか確認する。
- 定期的に自宅訪問して身体状況・使用状況・環境変化・介護負担状況・その他の聞き取りを行い利用者への再アセスメントを行っている。

用具選定、提案に関する取組

- 福祉用具利用の範囲にとらわれず、他のサービス利用との結びつき等を多面的に視野に入れた選定を心掛ける。
- 使用することにより生活動作が向上する事が予測できる場合には、選定の時点ではなくその先を見据えた福祉用具の導入を提案する。

利用者・家族、ケアマネジャー、他サービスとの連携に関する取組

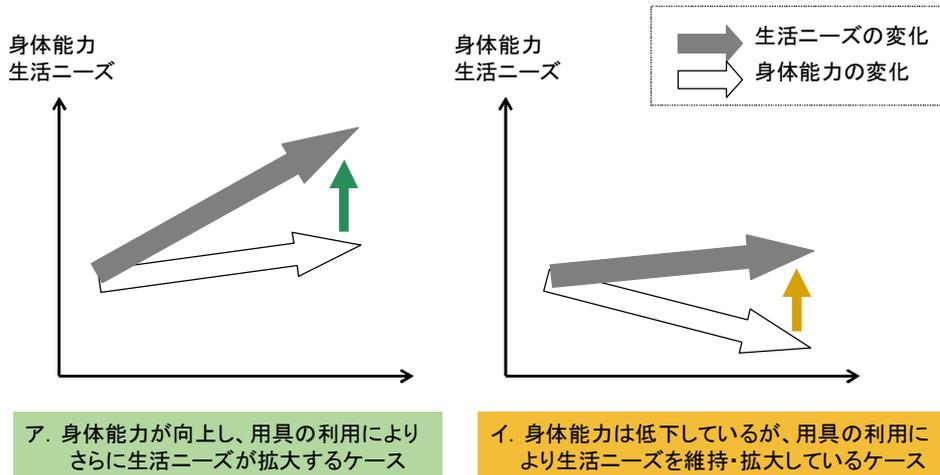
- サービス担当者会議に積極的に参加し、利用者、家族、ケアマネジャー、サービス事業者との連携を心がけ、状態把握や意見交換に努める。
- 状態が変化しやすい利用者については、担当ケアマネジャーと定期的に連携を心掛けて利用者の状態を常に確認している。
- 用具の不具合や故障等、異常やその兆候を利用者・家族が発見した場合に連絡がしやすいように、用具すべてに事業所のフリーダイヤルを記載したシールを貼っている。

その他

- 福祉用具専門相談員のスキルアップのため、社内外の研修受講を促進する。
- 利用者の状況の変化に応じた適切な交換・追加や、導入時の調整においてやむを得ない交換以外に、不要な交換が発生していないか、アセスメントや用具選定、試用も含めた導入のプロセスをあらためて見直す。

4. 事例の紹介

利用者の状況に応じて適切な用具を利用することで、利用者の生活の質を向上することができます。ここでは収集した事例について、**身体能力と生活ニーズ**という観点から、効果的な福祉用具利用のパターンを次のように大きく2つに区分して整理しました。



以下では、8つの事例を通して、効果的な交換・追加利用のポイントをご紹介します。

ア. 身体能力が向上し、さらに生活ニーズが拡大するケース

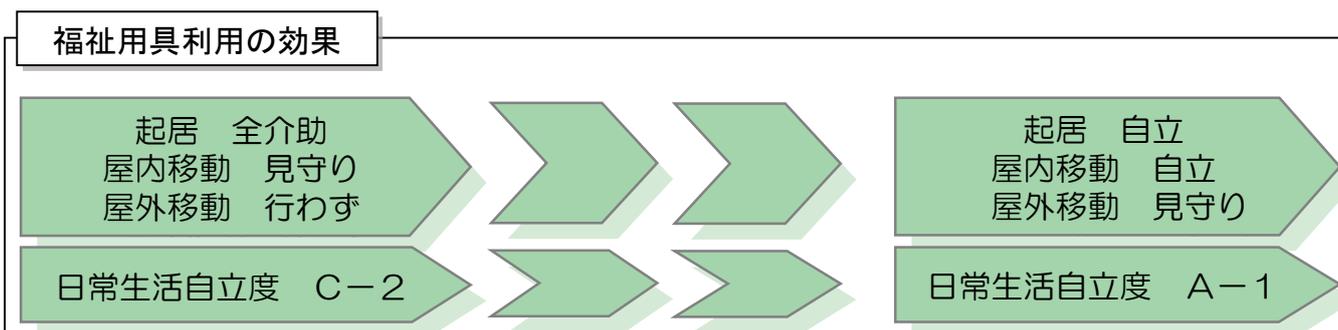
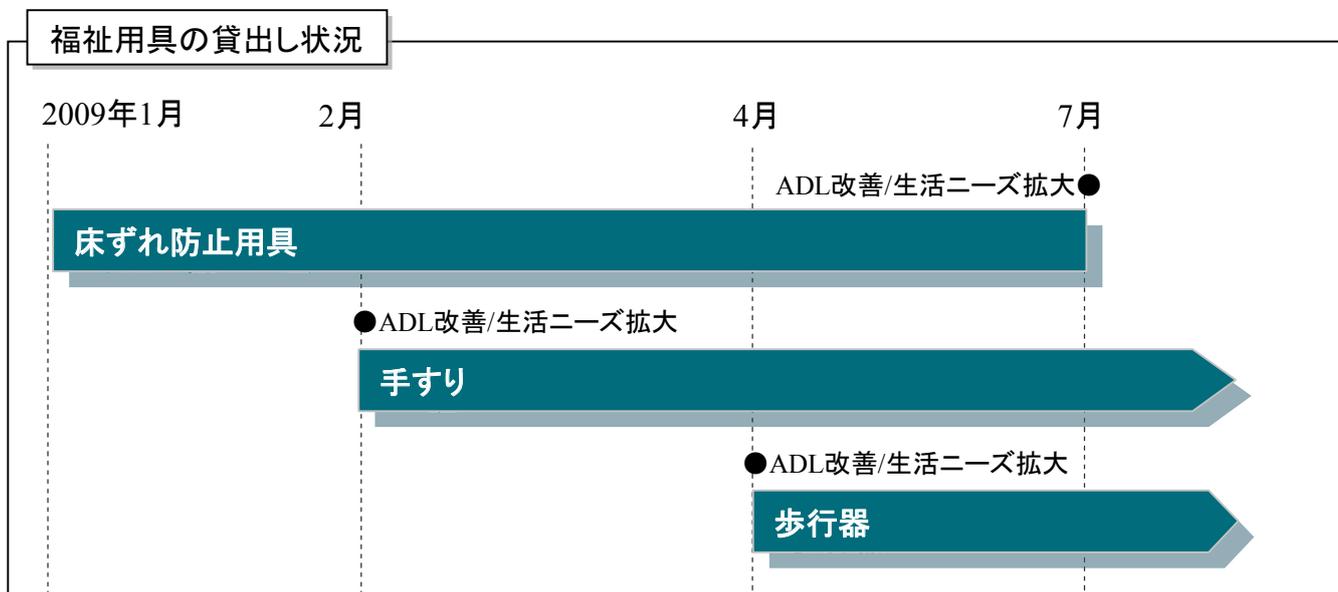
	起居動作関連	歩行・移動関連
事例1	床ずれ防止用具の返却	手すり・歩行器の活用
事例2	特殊寝台・付属品の返却	手すりの活用
事例3	特殊寝台・付属品の交換	歩行補助つえの活用
事例4	体位変換器の返却	車いすの交換（機種変更）

イ. 身体能力は低下したが、生活ニーズが維持・拡大しているケース

	起居動作関連	歩行・移動関連
事例5		歩行器を返却し、車いすを利用開始
事例6		歩行補助つえ⇒歩行器⇒車いす
事例7		歩行器を返却し、車いすを利用開始
事例8	特殊寝台を交換、床ずれ防止用具を返却	

身体能力が向上し、さらに生活ニーズが拡大するケース

■ 91歳 女性の事例 （要支援 現疾患：なし 認知症：軽度）



※C-2：1日中ベッド上で過ごし、排泄、食事、着替えにおいて介助を要する。自力で寝返りをうたない。

※A-1：屋内での生活は概ね自立しているが、介助なしには外出しない。介助により外出し、日中はほとんどベッドから離れて生活する。

ADL悪化により、床ずれ防止用具の利用を開始。その後、ADL改善・生活ニーズ拡大に伴い、床ずれ防止用具・手すり・歩行器の利用し、床ずれ防止用具は返却。

○利用者にとっての効果

- ・床ずれ防止用具・手すり・歩行器を利用することで、起居、屋内移動が一部介助から自立になった
- ・起居が自立したため離床した生活をするようになり、歩行が自立したため自由に好きなところへ行けるようになった
- ・手すりの利用により離床機会が増え、床ずれ回復の一助となり、歩行器の利用により長距離・長時間の離床が自然と身についた

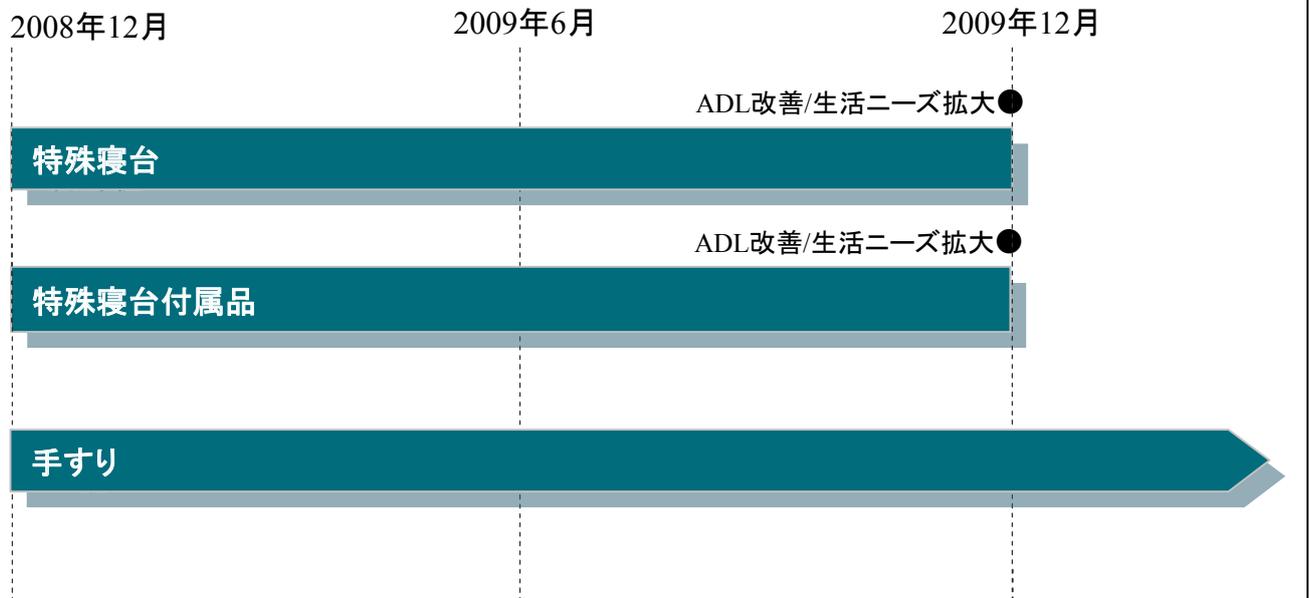
○介護者にとっての効果

- ・介護者の負担としては、起居、排泄、食事、更衣、移乗、屋内移動で負担が軽減し、楽になった
- ・介護時間が削減できた

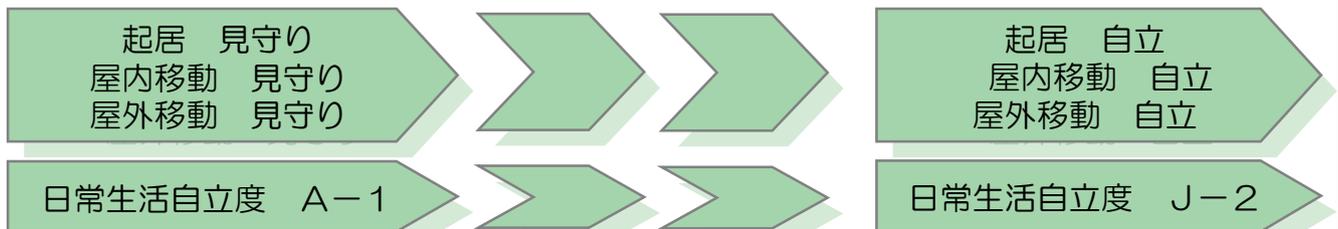
身体能力が向上し、さらに生活ニーズが拡大するケース

■ 70歳 男性の事例 (要介護2 現疾患：左下肢動脈閉塞 認知症：なし)

福祉用具の貸出し状況



福祉用具利用の効果



※A-1：屋内での生活は概ね自立しているが、介助なしには外出しない。介助により外出し、日中はほとんどベッドから離れて生活する。

※J-2：何らかの障害等を有するが、日常生活はほぼ自立しており独力で外出する。隣近所へなら外出する。

ADL悪化により、特殊寝台、特殊寝台付属品および手すりの利用を開始。その後、ADL改善・生活ニーズ拡大に伴い、特殊寝台、特殊寝台付属品は返却。

○利用者にとっての効果

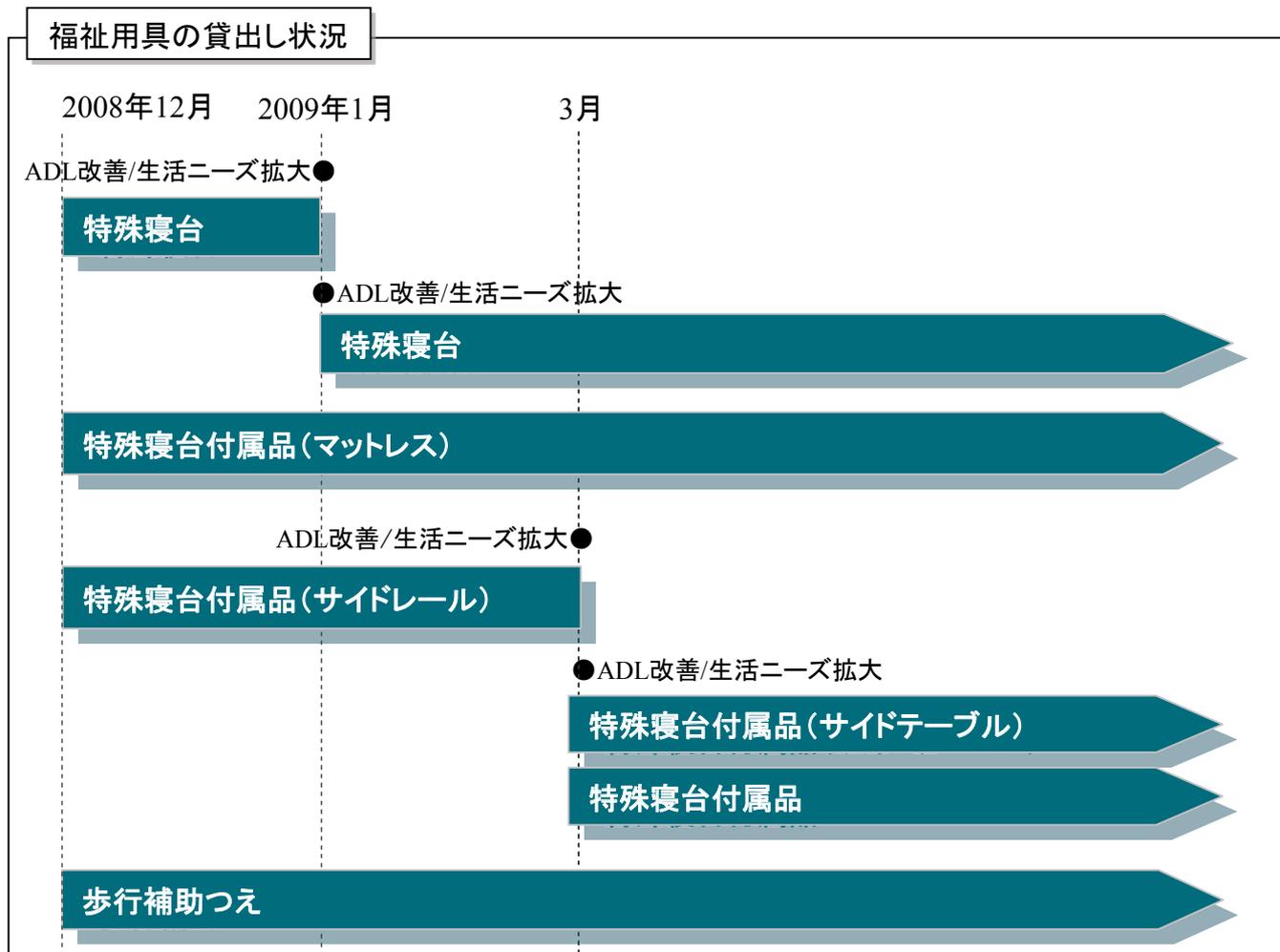
- ・特殊寝台を利用することにより、起居、移動が見守りから自立に向上
- ・利用者自身の生活行動が意欲的になった

○介護者にとっての効果

- ・介護者の負担としては、起居、入浴、更衣、屋内移動、屋外移動が楽になった
- ・介護時間が削減できた

身体能力が向上し、さらに生活ニーズが拡大するケース

■ 66歳 女性の事例 (要介護2 現疾患：なし 認知症：なし)



福祉用具利用の効果

起居 一部介助
排泄 一部介助
移乗 一部介助

起居 自立
排泄 自立
移乗 自立

ADL改善/生活ニーズ拡大により、特殊寝台、特殊寝台付属品、歩行補助つえの利用を開始。その後、ADL改善・生活ニーズ拡大に伴い、特殊寝台を交換、特殊寝台付属品を交換・追加。

○利用者にとっての効果

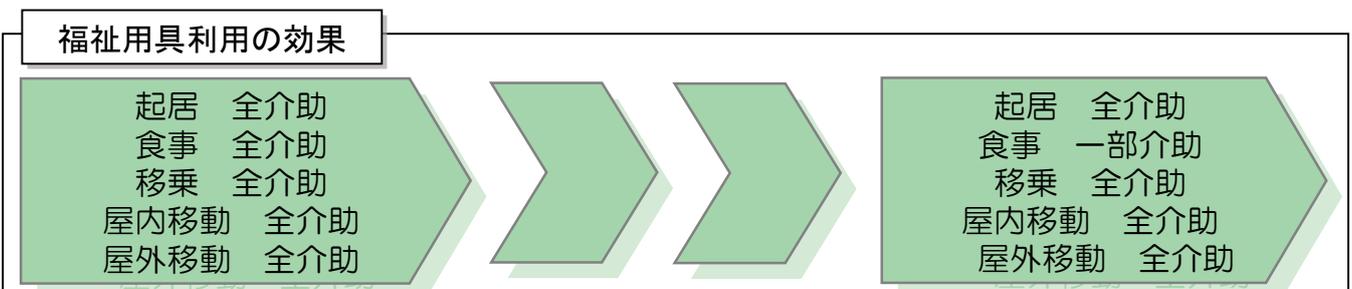
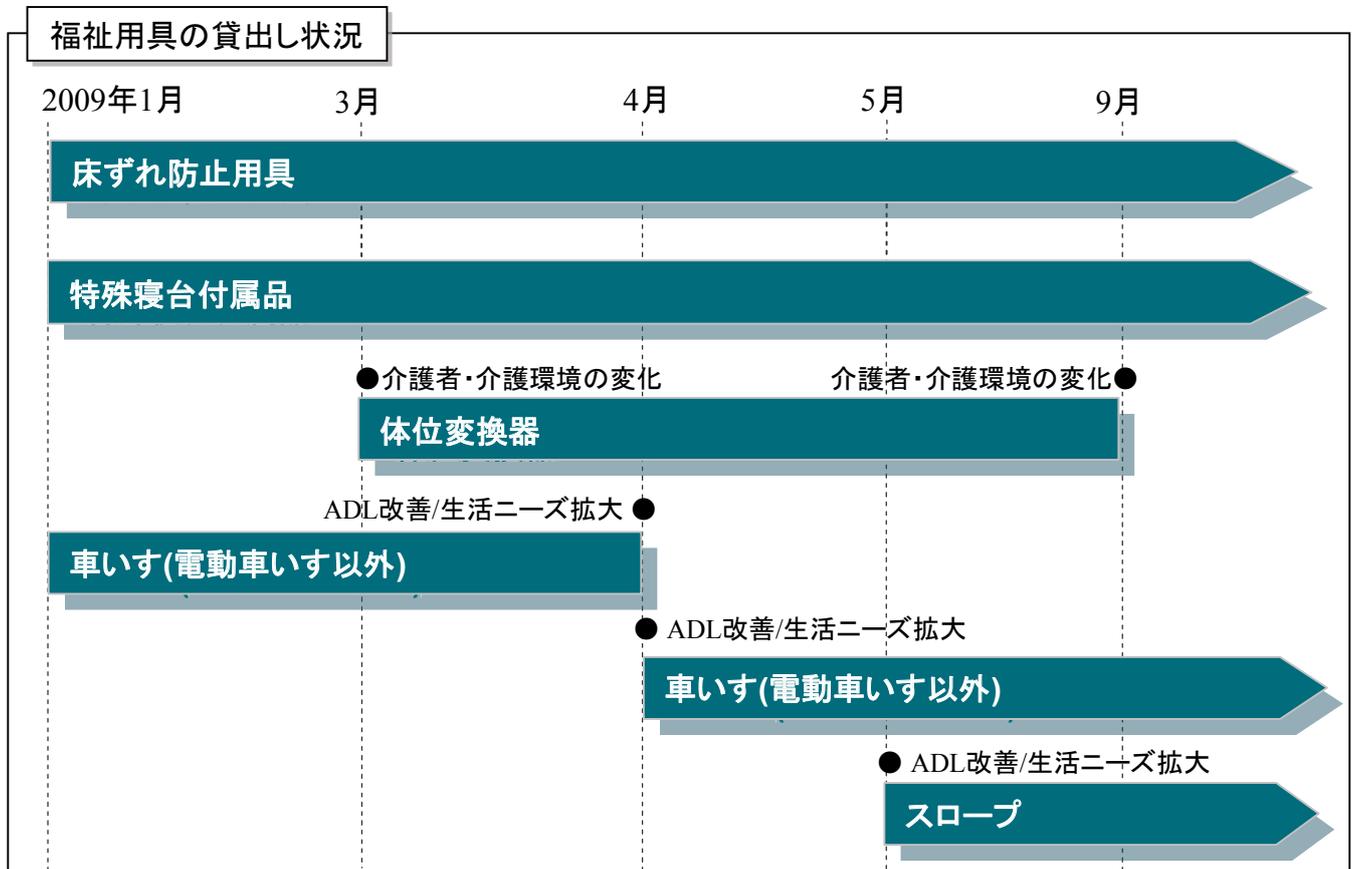
- ・ADL改善に伴い、特殊寝台や歩行補助つえなどを利用
- ・歩行補助つえを利用することにより、起居、排泄、移乗が一部介助より自立に向上した

○介護者にとっての効果

- ・介護者の負担としては、起居、排泄、移乗が楽になった
- ・介護時間が削減できた

身体能力が向上し、さらに生活ニーズが拡大するケース

■ 84歳 女性の事例 (要介護5 現疾患：リウマチ 認知症：軽度)



導入初期の適合・調整、ADL改善/生活ニーズ拡大により、床ずれ防止用具、特殊寝台付属品、車いす（電動車いす以外）の利用を開始。その後、介護者・介護環境の変化に伴い、体位変換器を追加・返却。ADL改善/生活ニーズ拡大に伴い、車いす（電動車いす以外）を交換、スロープを追加。

○利用者にとっての効果

- ・床ずれ防止用具・車いす・特殊寝台付属品・体位変換器・スロープを利用することで、食事が全介助から一部介助になった
- ・車いすなどを利用することにより、外出の頻度が増加した

○介護者にとっての効果

- ・介護者の負担としては、起居、排泄、食事、屋外移動で負担が軽減し、楽になった
- ・介護時間が削減できた

身体能力は低下したが生活ニーズを維持・拡大している事例

■ 94歳 男性の事例 （要介護1 現疾患：なし 認知症：軽度）

福祉用具の貸出し状況

2008年12月

2009年8月

歩行器

●ADL悪化

●ADL改善/生活ニーズ拡大

車いす
(電動車いす以外)

福祉用具利用の効果

起居 一部介助
排泄 一部介助
屋内移動 一部介助
屋外移動 一部介助

日常生活自立度 A-1

起居 見守り
排泄 見守り
屋内移動 見守り
屋外移動 見守り

日常生活自立度 J-2

※A-1：屋内での生活は概ね自立しているが、介助なしには外出しない。介助により外出し、日中はほとんどベッドから離れて生活する。

※J-2：何らかの障害等を有するが、日常生活はほぼ自立しており独力で外出する。隣近所へなら外出する。

ADL改善/生活ニーズ拡大により、歩行器の利用を開始。その後、ADL悪化に伴い、歩行器は返却し、ADL改善/生活ニーズ拡大のため、車いすの利用を開始。

○利用者にとっての効果

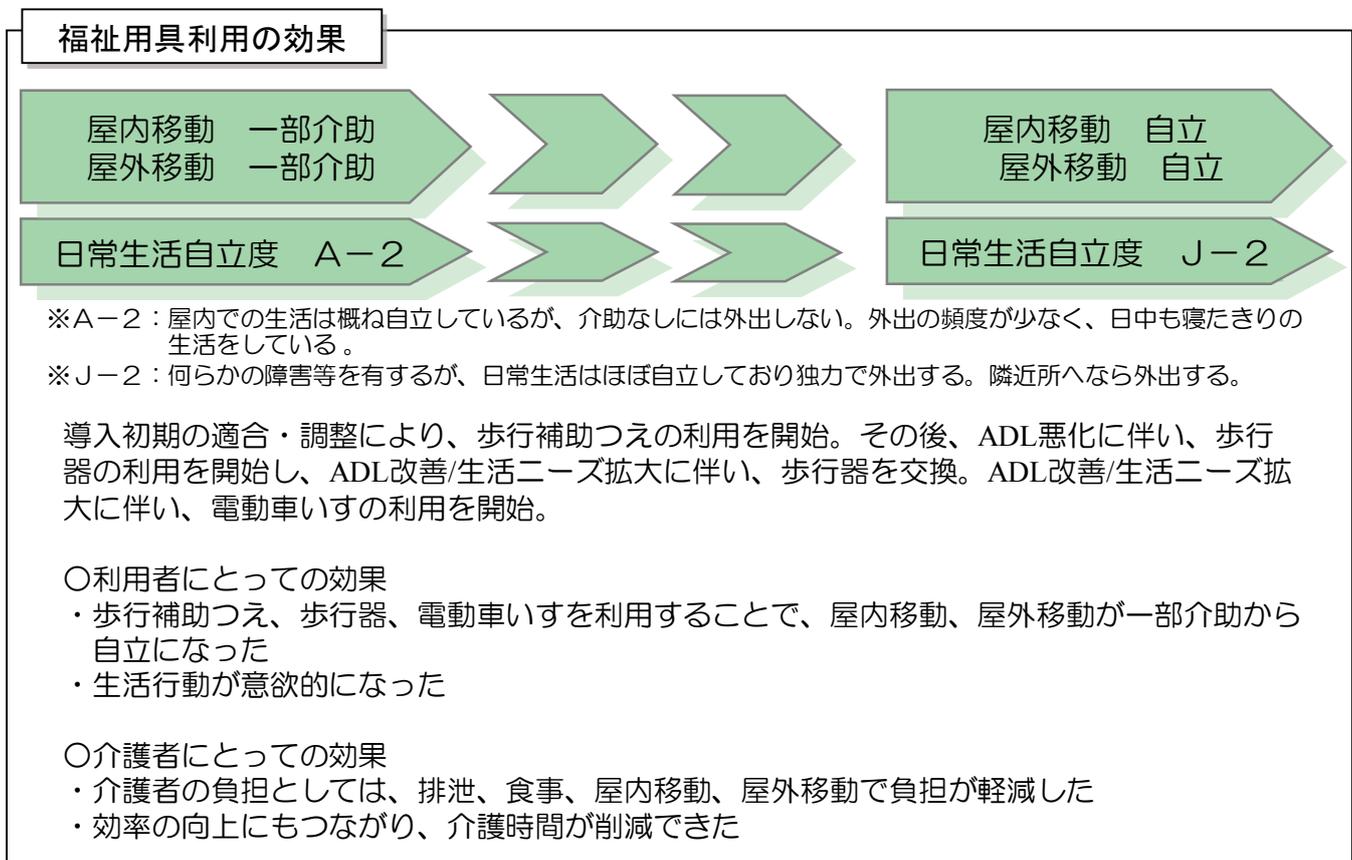
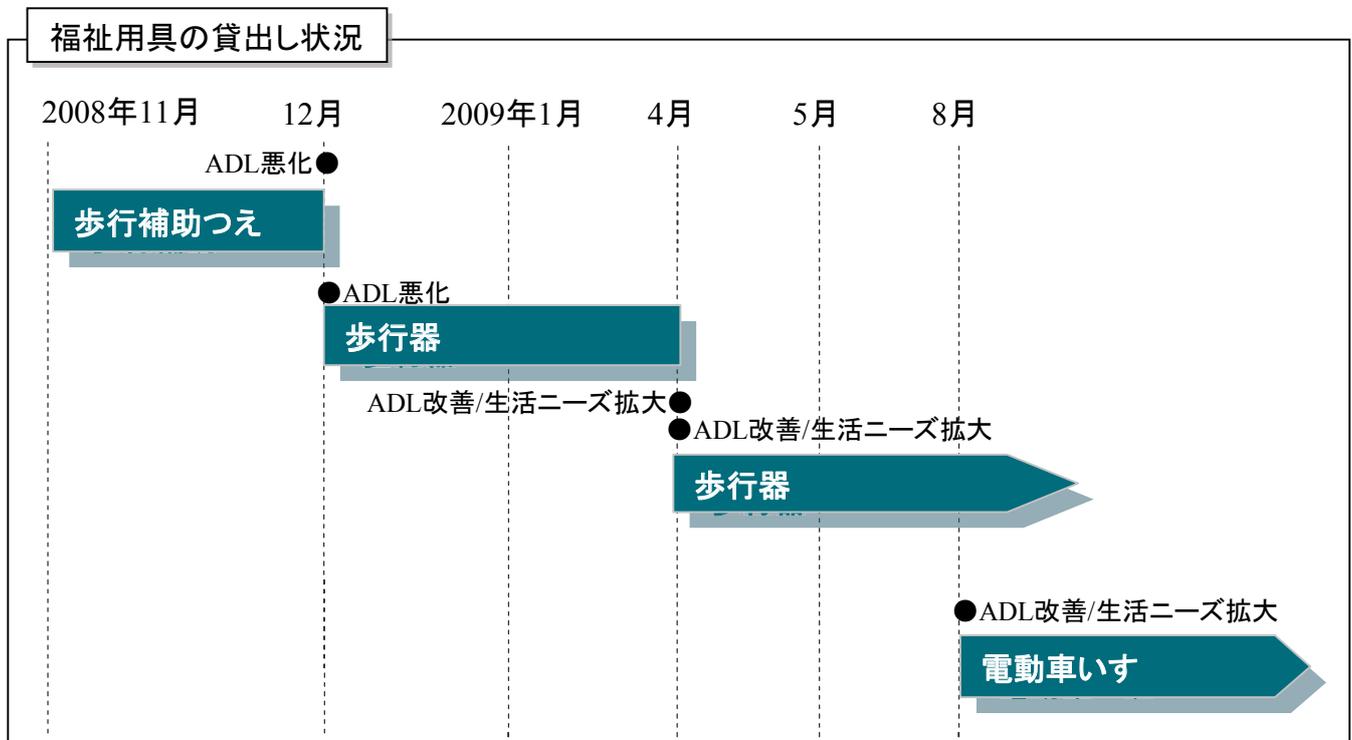
- ・車いす（電動車いす以外）、歩行器を利用することにより、起居、排泄、屋内移動、屋外移動が全介助から一部介助に向上
- ・生活行動が意欲的になった

○介護者にとっての効果

- ・介護者の負担としては、起居、排泄、屋内移動、屋外移動が楽になった
- ・介護時間が削減できた

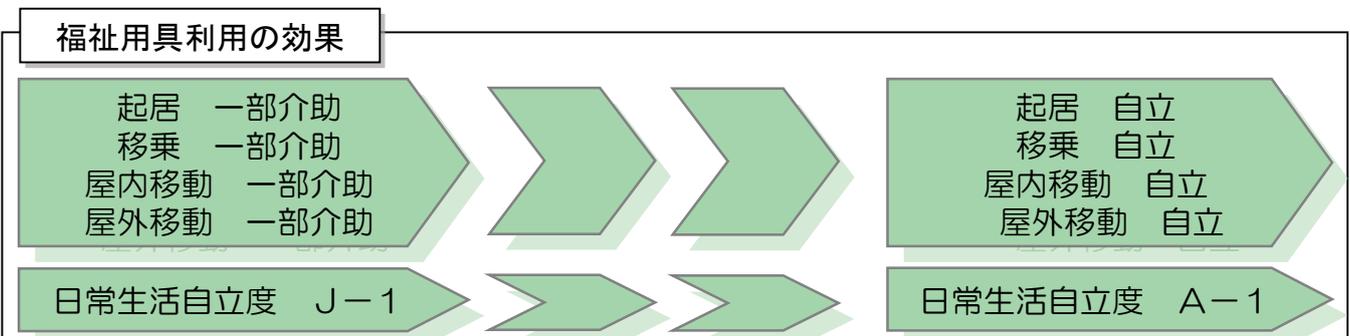
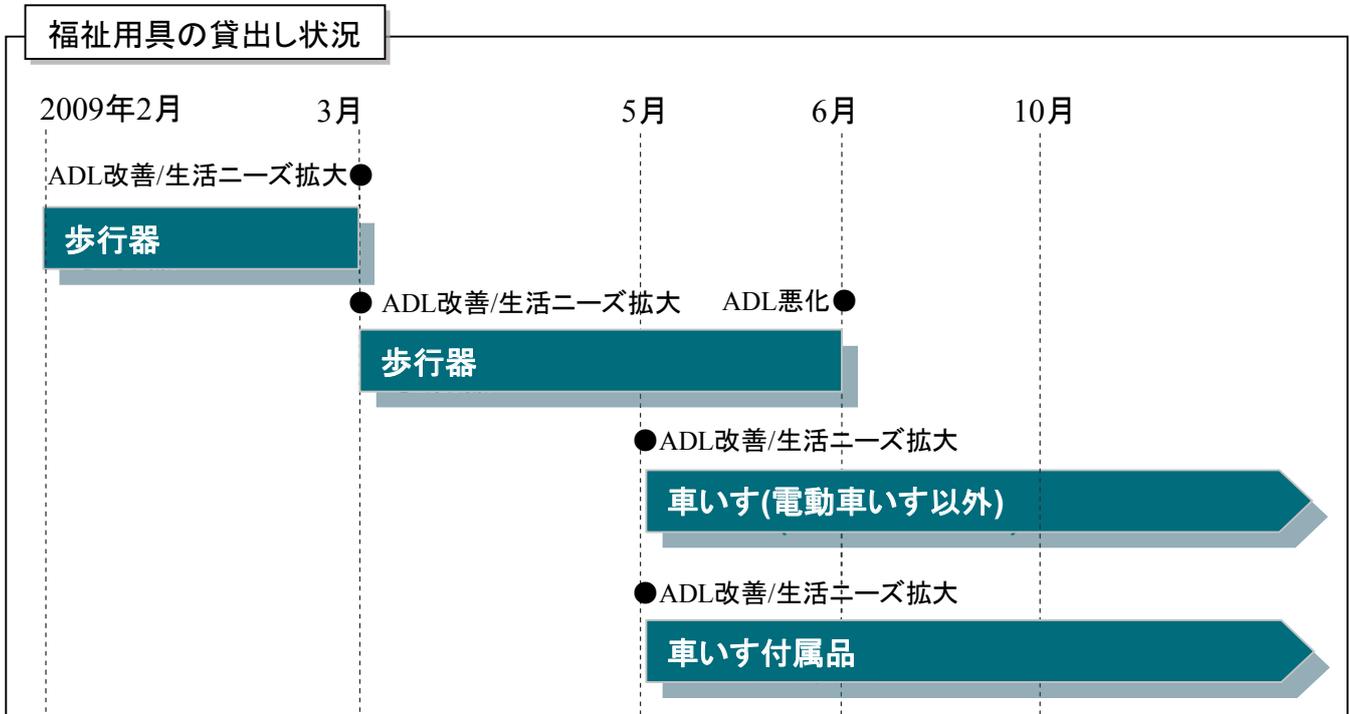
身体能力は低下したが生活ニーズを維持・拡大している事例

■ 73歳 女性の事例（要介護2 現疾患：右大腿骨骨折 認知症：なし）



身体能力は低下したが生活ニーズを維持・拡大している事例

■ 74歳 男性の事例 (要介護3 現疾患：後縦靭帯骨化症 認知症：なし)



※J-1：何らかの障害等を有するが、日常生活はほぼ自立しており独力で外出する。交通機関等を利用して外出する。
 ※A-1：屋内での生活は概ね自立しているが、介助なしには外出しない。介助により外出し、日中はほとんどベッドから離れて生活する。

ADL改善・生活ニーズ拡大により、歩行器の利用を開始。その後、ADL改善/生活ニーズ拡大に伴い、歩行器を交換。ADL改善・生活ニーズ拡大に伴い、車いす（電動車いす以外）、車いす付属品の利用を開始し、ADL悪化に伴い歩行器を返却。

○利用者にとっての効果

- ・歩行器・車いすを利用することで、起居、移乗、屋内移動、屋外移動が一部介助から自立になった

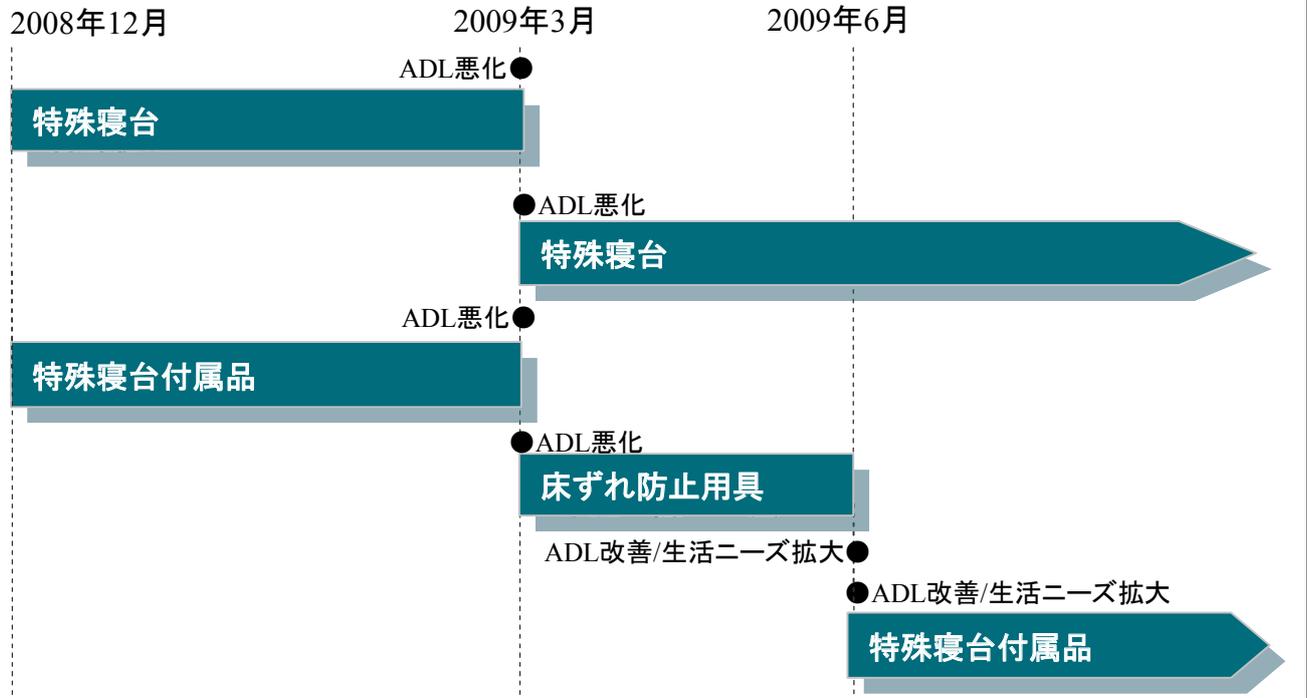
○介護者にとっての効果

- ・介護者の負担としては、起居、排泄、食事、移乗、屋内移動で負担が軽減し、楽になった
- ・介護時間が削減できた

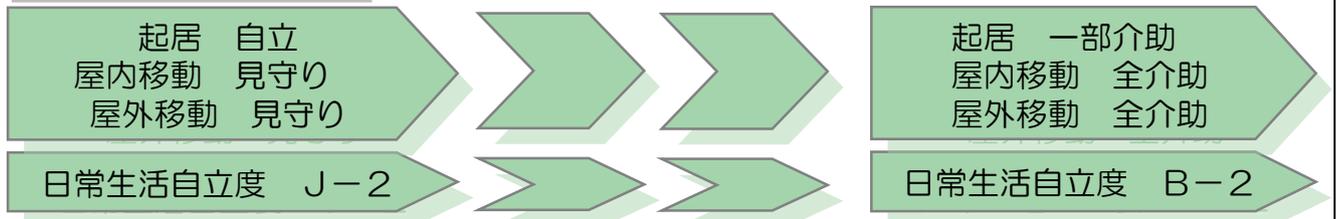
身体能力は低下したが生活ニーズを維持・拡大している事例

■ 97歳 女性の事例 （要介護3 現疾患：腰部脊椎管狭窄症 認知症：中度）

福祉用具の貸出し状況



福祉用具利用の効果



※J-2：何らかの障害等を有するが、日常生活はほぼ自立しており独力で外出する。隣近所へなら外出する。

※B-2：屋内での生活は何らかの介助を要し、日中もベッド状での生活が主体であるが座位を保つ。介助により車椅子に移乗する。

ADL悪化により、特殊寝台、特殊寝台付属品の利用を開始。その後、ADL悪化に伴い、特殊寝台付属品を交換、特殊寝台付属品を返却、床ずれ防止用具を追加。ADL改善/生活ニーズ拡大に伴い、特殊寝台付属品を追加。

○利用者にとっての効果

- ・特殊寝台を利用することにより、起居が自立から一部介助となるが、動作が円滑になり安定性をはかれた
- ・移動、移乗、起居動作を安全に行うことができ、腰痛などの痛みの緩和、転倒の危険を回避できている。寝たきりの生活にならないことにより、福祉用具利用前と同じ生活リズムを保ち、本人の活力の維持、認知症の進行を防止できている。

○介護者にとっての効果

- ・介護者の負担としては、起居、更衣、移乗、屋内移動、屋外移動が楽になった
- ・介護時間が削減できた

おわりに

この事例集は、平成21年度老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）事業として、日本福祉用具供給協会が実施した「状態像に応じた福祉用具の交換利用効果に関する調査」の成果であり、事業の一環として実施したアンケート調査やヒアリング調査の結果に基づいて、作成されたものです。

調査にご協力いただきました事業者の皆様には厚く御礼申し上げます。この事例集が少しでも多くの福祉用具関係者の皆様により、個々のケースにおいて、効果的な交換利用の推進に役立てていただければ幸いです。

平成22年3月

社団法人日本福祉用具供給協会



状態像に応じた福祉用具の交換利用効果事例集

平成22年3月 発行

発行者 社団法人日本福祉用具供給協会
〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-6-13 3F
TEL 03-3234-8281
FAX 03-3288-3077

本事業は、平成21年度老人保健事業推進費等補助金を受け、行ったものです。

